紙と筆

伴野朋裕
臨床医学系講師

前号「IT革命と教育を考える」を読んで，江藤　淳氏が1996年1月の新聞に寄せた稿を思い出した。青春は「自分探し」の病気のようなもの。自己嫌悪に胸を噛まれながら，「自分」以外のものになろうとして七転八倒し，愚行を重ねたあげくの果てに「自分」でしかない自分に投げ戻される，それが昔の青春だった。今では青春が終わらない。人間の行動半径はインドはおろか地の果てまで拡大し，おまけにインターネットの出現で擬似空間を瞬時に情報が飛び交うにつれて，探すべき「自分」はどんどん遠ざかる。蓋し，インターネットがどれほど多様な情報を提供するとしても，「自分とは何か？」という情報だけは供給してくれないからである。そう語った彼は数年後にこの世を去った。

禅僧はなぜ山に籠ったか。自分を知るために先人たちが選んだ道は世俗との遮断であった。あらゆる分野の効率化を実現するIT革命が教育にも福音をもたらすと考えるのは当然であるが，われわれが学ぶ理由のひとつが自分を知るためだとすれば，IT化のもたらす教育環境は我々が自己を深く見つめて考える余裕を奪うだろう。溢れ出る情報に誰も躊躇していられないからである。しかし，情報を得ることと知識を得ることは多少異なり，知識を得ることと学ぶこともまた異なる。更に真理を求めるとなるとむしろ無駄な情報を削ぎ落とす過程が必要だろう。

かくいう自分もインターネットの恩恵にずいぶん浴してはいる。文献検索は大変便利になったし，電子メールでは海外の知人とも簡単に遣り取りできる。量と速度については間違いなく五つ星だ。情報を得たり交信するための手段と割り切ればこんなに便利で強力なものはない。しかし，自分は今でも紙と鉛筆がなければ思考が進まない。

数年前に20巻以上もある百科事典を購入した。インターネットが盛んになり百科事典が退化して消滅すると思ったからだ。疲れた時などこれをぱらぱら捲ると有限の書物のなかにも様々な人物や動植物にも出会えて実に楽しく気が安まる。同じようなことはネットサーフィンでもできるが，そちらはどっと疲れて終いには虚しくなる。この違いがなぜかは分らないが，IT革命と教育を考えるうえでひとつのヒントになるかもしれない。

（ばんのともひろ　皮膚科学専攻）